

◆平成 27 年度 第 3 回 (通算第 50 回) 蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2015 年 6 月 26 日 (金)

場所：すずかけ台 J221 講義室

転職のきっかけは？一弁理士の日常

会社勤務～特許事務所勤務～弁理士取得～独立開業…

阿部 正博 (1980 高分子, 83 生命化学 MS) 千葉ユナイテッド特許事務所 代表パートナー
元森永製菓(株)生科学研究所 研究員

誰かに似ていると思いつつながら、壇上の阿部さんを斜め横から観察していたが、最後のスライドを見て、「そうだ、スティーブ・ジョブズだ！」とようやく 2 人のイメージが重なった。結びのスライドで映し出されたのが "The Whole Earth Catalog" (WEC) ^(注 1) 最終号の裏表紙で、そこには "**Stay Hungry. Stay Foolish.**" と刻まれていた。Stay Hungry. Stay Foolish という、アップル社の Steve Jobs (1955~2011) を思い浮かべるが、この言葉はジョブズの発案ではなく、ジョブズがスタンフォード大学の卒業式でおこなったスピーチの最後で紹介しているように ^(注 2)、上記 WEC の創刊者である Stewart Brand (1938~) が発信源だ。ジョブズが学生の頃を振り返って、「この冊子との出会いがなければ、今日の自分はなかっただろう」というほど、革新的かつ衝撃的な発想に満ちていたようだ。

WEC 創刊者の Stewart Brand は、NASA に対し 宇宙から撮った地球の写真を公開するよう求め、漆黒の宇宙空間に浮かぶ地球の姿を私たちに見せてくれた人でもある。この写真を通して、私たちは多くのことを学んだ。発想の転換を迫られたと言ってもいいだろう。The Whole Earth Catalog は私たちの心のためのカタログだったのかも知れない。そんなカタログを作った人たちがいたことを知っただけでも、今回のゼミに出席した甲斐があったのではないだろうか。

Catalog といえば商品カタログと思っていた時に、カリフォルニア工科大学 (Caltech) の案内冊子が Caltech Catalog だったことに驚いたことがある。本学も Caltech Catalog や The Whole Earth Catalog と肩を並べるべく Tokyo Tech Catalog の内容を魅力的にしていかなければならない。その一助になればと、この蔵前ゼミの印象記を書いてきているが、学生の心をつかむのは思いのほか難しい。学内の

講義資料配信サイト Open Course Ware (OCWi) で受講生 (約 200 名) に案内をするのだが、わずか 23 名しかダウンロードして読んでくれないのだ。ショッキングな数字だが、それでも 23 名に読み続けてもらうために、キーボードに向かうことにしよう。

生い立ちから M1 でのスイス留学まで

阿部さんは千葉で育ち、本学の 3 類に入学後、高分子工学科に進んだ。留学してみたいという希望が強かったので、1 年生の時は部活 (サッカー部) の他に資金稼ぎのためのアルバイトにも精を出したが、学部での留学は見送ることにした。卒業研究では、野瀬卓平 (1963 化工, 65MS) 研究室で高分子の構造と物性に関する研究に従事した。大学院進学に際しては、同じ高分子でも、生体高分子の方がおもしろそうだと思います、長津田キャンパス (現すずかけ台キャンパス) の生命化学専攻に進み、野宗嘉明 (1927~1998, 1950 化学) 研究室に所属した ^(注 3)。

ここで、かねてからの計画だった留学を実行に移すことになるが、交換留学制度を利用して本学のパートナー校であるスイスの ETH Zürich に行くことにした (1981~1982)。費用はスイス政府持ちで有難かったが、当時の制度では留学期間中は休学扱いとなり、卒業は 1 年遅れとなった (1983)。スイスでは日常生活はドイツ語で用を足さざるを得ず、独学で何とか買い物ができるようになった。ドイツ語で苦勞したお陰で、英語のハードルが急に低く感じられるようになったそうだ。英語なら何とかなると思えるようになったのはスイスに留学した大きな収穫らしい。しかし、行ってみてはっきりしたのは、皮肉にも、“自分は研究者に向いていない” ということだった。



ETH Zürich は北海道とほぼ同じ緯度のところに位置する

弱点を回避し長所を生かすための転職

1 回目の転職は 28 歳の時

それまでは、自分が何に向いているかを突き詰めて考えていなかった。ETH Zürich に行ったのは M1 の秋から 1 年間だが、その前に、指導教員の強い勧めで森永製菓(株) 生科学研究所に就職が決まっていた。自分の長所と短所を分析し、将来について真剣に考えた結果ではなく、なんとなく決まった感じだったそうだ。今から当時を振り返ってみると、(多少格好つけになるが)、自分の **Strong points** としては言葉に対する関心があり、TOEIC で高得点をとっていたこと、**Weak points** としては不器用で実験が下手だったことなどを冷静に受け止め、将来のキャリアについて考えておくべきだったと思うそうだ。このずれ(注4)は、会社で研究者として歩み始めてみると、ますます大きくなり、今の仕事が自分の能力・適性にマッチしていないのではないかという思いが強くなっていった。

それとなく妻に転職をほのめかしてみたが、猛反対された。長男が生まれたばかりだったし、社宅住まいでもあった。厳格な義父の顔も浮かんできた。義父は陸軍士官学校卒の軍人だっただけに、「2 年もしないうちに辞めるとは何事だ！石の上にも 3 年というだろう！紹介してくれた先生に申し訳ないと思わないのか！」と鉄拳が飛んできそうなほど怖い人だった。こうして葛藤の日々が続いたが、相性が悪いものはいかんともしがたく、転職を決意した。当初反対だった奥さんの理解が得られたこともそれを後押しした。

自分の能力と特質(注4)を熟考の末の転職だったことは強調しておかなければならない。転職先とし

ては特許関係と科学雑誌出版社を考えたが、最終的には特許事務所に絞り、新聞に載る求人広告の大きさや頻度を参考に外国と取引のある在京の大手特許事務所に決めた。それでも、成功する自信は 55~60%しかない状況での決断だったそうだ。僅差でも有利な証拠があればその流れを採用することを民事訴訟では、**Preponderance of evidence** (more-likely-than-not, 証拠の優越, 50%超原則) というそうだ。阿部さんの第 1 回目の転職はこの原則に従った行動だった。

職探し以上に難しかったのは、家族と職場の上司に伝えることだったそうだ。職場の上司だった人は研究室の大先輩(8 歳年上)でもあり、阿部さんに期待を寄せてくれていたから、さぞ言い出しにくかったろう。このようないきさつを説明した上で、阿部さんは心の重荷が取れたようにようやく上着を脱いだ。当の上司が会場にいたのだ。阿部さんの気持ちは通じたに違いない。義父から鉄拳を喰らったのだろうか？と想像しながら、我が家では **Going my way** が強引マイウェイと訳されていることを思い出した。

義理を欠く話を切り出すのはつらい。昔から、振るより振られるほうがラクだと言われるゆえんでもある。阿部さんはどのように転職を切り出したのだろうと想像しながら、30 数年前に聞いた若手医師の話思い出した。その医師はインターン終了後、ドクターヘリ (Air ambulance) に憧れと使命感を持って、離島を抱える地方の病院に赴任した。しかし、行ってみると、見ると聞くでは大違いで、お爺ちゃんとお婆ちゃんの話し相手が日課とっていいほど、医師としての腕を振るう場面はなかった。向上心と貢献心に燃える若手医師にはとてもつらい日々で、半年ほどしたところで再び大学の医局に戻りたいと思うようになった。しかし無理に頼み込んで採用して貰ったいきさつもあり、そう簡単には「辞めさせて下さい」とは言い出せなかった。心の葛藤は腸の異変となって表れることが多い。この医師の場合は、神経性の下痢が止まらなくなった。このままでは体を壊す。せっぱ詰まって「大学に戻りたい」と願い出た。『あんなにつらい思いは 2 度としたくない』と思ったそうだ。誠意を尽くして説明し、大学に戻してもらった。しばらく研究に専念し、博士号をとってから県立病院に勤め、今は院長として活躍中だ。

最初の特許事務所はバブル期と重なり絶好調 毎年数回 大名行列のように海外出張

転職先で働いた期間(1985~1994, 28~37歳)は、日本経済のバブル期(1986~1991)と重なり、会社の業績も好調だった。海外クライアント(顧客)も多かった関係で、出張を兼ねて、年に数回は大名行列のように海外に繰り出していたそうだ。このように総勢百数十名の特許事務所の特許技術者として働くかたわら、弁理士の資格を取るための勉強を始めた。心配をかけた家族への償いという意味もあったが、顧客から専門家として認めてもらいたいという気持ちが強くなったからだ。すでに30歳になっていたが、弁理士試験に挑戦するために、平日の夜と土日に猛勉強した。長女が生まれたために一時ペースダウンしたが、3年間の受験勉強が実り、1990年(33歳の時)に合格した。当時は狭き門で、毎年約3000人が受験し、わずか100人程度しか受からなかった(注5)。

大手特許事務所で弁理士として働くことには、それなりのメリットもあったが、7~8年もしてみると、肥大化・分業化による弊害が目につくようになり、経営方針や体制に対しても違和感を持つようになった。さらに、弁理士としての自信と欲が芽生えてきた。(1) 代理人としてクライアントとより直接的に関わり満足してもらえたい仕事をしたい、(2) 特許事務所における業務全体に関与したい、(3) 自らの判断で仕事をしたいという願望が強くなったのだ。それには小規模な特許事務所がいいということで、9年目(1994年)37歳の時に2回目の転職をした。

2回目は自信満々の転職だったが 思わぬ人間関係のトラブルであえなく破綻

今回の転職には、80~90%の自信があったそうだ。民事訴訟における裁判所の判断基準でいう“Clear and convincing evidence”で、あらゆる種類の訴訟で勝訴を勝ち取れるレベルだ。総勢10名程度の事務所だったが、所長代行として思う存分に腕を振るうことができた。頼りにしてくれる国内外のクライアントが増え、特許事務所の経営にも自信が持てるようになった。そんなさなかに、後継者問題で人間関係が軋み始めた。この小規模事務所にも世話になったのは3年足らずだったが、自信や顧客の信頼など、得るものは多かった。辞めて自分の

事務所を持つことを躊躇させるものは何もなく、独立には98%以上の自信があったそうだ(法律用語では”Beyond a reasonable doubt”)。もう一つ、40歳という年齢を考えると、仮に失敗したとしても、別の特許事務所に再就職するのは難しくない。こう考えて自宅近くのワンルームマンションに「阿部内外特許事務所」を開設した(1997)。

サラリーマンから個人事業者へ(1997)

独立を後押ししてくれたインターネットやPCの普及と 特許庁の電子化

当座の開業資金は、事務所の賃料に事務機器などを加えて約80万円だったそうだ。(1) PCでの文書作成が普通となり、秘書やタイピストを雇わなくても自分一人で業務が遂行できるようになっていたこと、(2) 子供たちが小学生になっていたの、経理事務は奥さんが手伝ってくれたこと、(3) インターネットの普及で海外クライアントとのやり取りがemailで簡単にできるようになったこと、(4) 特許庁の電子申請手続きが簡素化されたことなど、阿部さんにとっては順風が吹いていた。

阿部さんの強みは、何といても外国のクライアントの信頼を得ていることだ。専門知識に加え、英語力がその根底にある。語学の才能は生来のものとしても、それにどのようにして磨きをかけたかは参考になると思って聞いてみた。「特に変わったことはしていません。英会話学校にも殆ど行っていませんし…、NHKの英語番組を聞いたぐらいでしょうか。今も気分転換に聞き流していますが、テキストは最近では買わなくなっています」との返事だった。『継続は力なり』(Practice makes perfect)を実践して見せてくれたのが阿部さんだ。言葉に対する関心の有無が弁理士の世界では勝敗を分ける。弁理士(注6)とは発明を言葉にする人といえそう。

事業の拡大

千葉ユナイテッド特許事務所の設立(2010)

よりよい顧客サービスと事業基盤の強化を図るために、同じ千葉県在住の弁理士(機械が専門)と一緒に共同経営の事務所を立ち上げた。事務所の名前(CHIBA UNITED)が評判になり、英国の知人やクライアントからは好評だったそうだ。サッカー好きの人ならば説明不要だろう。名門チーム

Manchester United には香川真司も所属したことがある。

阿部さんの場合は、主に化学・医薬・バイオ分野の特許が中心になっているが昨年の出願実績は、国内の出願が 39 件、海外への出願^(注7)が 15 件だった。この他、意匠出願 20 件、商標出願 3 件を扱った。ドイツの自動車メーカー Audi から意匠登録では頼りにされているようだ。海外メーカーとのやり取りは、負担は重いが収益率が高いので、売り上げベースでは、40%にもなるそうだ。大学では、東北大からの依頼が多いという話だった。これからは本学も頼んだらどうだろう。

弁理士の日常

仕事のスタイル：阿部さんは、8:30 から 19:00 頃までオフィスで机に向かう。発明を言葉にするのは根詰め仕事ゆえ、がんばれるのは集中力が持続する 19:00 頃まで；仕事は根性より能率本位が基本だ。メールや電話で仕事がこなせるようになったので、外出するのは、せいぜい月に数日だそうだ。時差のある海外との関係で土曜日でもオフィスに行きメール等の確認と必要ならば返事をする。東京で開かれる研修会には積極的に参加し、最新情報を入手するようにしているそうだ。これは、図らずも、急速に変貌を遂げつつある東京の街並みを知ることにもなり、浦島太郎にならずにすんでいる。休み(休暇)はあらかじめ設定しておかないと取れないそうだ^(注8)。『そのうちに、時間ができたら休もう』では年中無休となってしまうらしい。私も阿部方式を見習わないと、「定年になったら、高尾山に付き合うよ」が実現しそうにない。

仕事の内容：書類を作ることが基本だが、すんなりと特許が認められることは少ないので、クライアントと特許庁の間を仲介し、最終的に特許が成立するように手伝う。特許がらみの裁判で代理人を務めることもある。外国の企業が日本企業にライセンスを付与する場合などでは、交渉の場で通訳を務めたり、契約書(正本となる英語版)の日本語訳を作ったりもするそうだ。

阿部さんからのメッセージ

まとめのスライドの最初に書かれていたのは、本ゼミの看板と同じ「就職はゴールではない」だった。キャリアアップを目指して若者ならではのチ

ャレンジをして欲しい。一つの会社で種々のチャレンジをし、納得のいく仕事ができれば、それに越したことはないが、転職がきっかけで活力と働き甲斐に満ちた世界が開けることもある。迷ったり悩んだりしたら、転職を一つの転機と考えて前向きにとらえることも悪くないだろう。軽率な転職や感情的な転職で後悔しないよう、自分をよくみつめ **Strong points** や **Weak points** を冷静に分析しよう。勤め始めたら社会的存在となるので、周囲の人たちとの繋がりを自覚し、独りよがりにならないことが肝心だそうだ。

質疑応答の時に阿部さんが言っていた「弁理士試験には英語はないが、仕事のチャンスを広げるためには英語は大切」というアドバイスも心に留めておこう。

エンディング余話

冒頭で紹介した The Whole Earth Catalog が復刊されたら、是非載せて欲しい場面(人)に遭遇した。2015年6月29日の朝の大井町線での出来事だ。自由が丘駅では多くの人が降りるので空席ができる。その日は たまたま出入口に近い座席が2つ空いた。そこに座ろうと、少し離れたところにいた人が棚から荷物をとって移動しようとしていた矢先に、小学5~6年生と思われる女の子の集団が駆け込んできて、チャッカリ座ってしまった。男の子だったら私の怒りも爆発していたに違いないが、女の子なので注意するかどうか一瞬迷った。そしたら引率の先生と思われる女性が少し離れたところから、「すみません、すみません」と言いながら乗客の間をぬってやってきて、「あなたたち、立ちなさい！」と一喝したのだ。前夜のNHKの番組「BS1スペシャル『10億人が愛した高倉健』」の余韻もあって、先生の名前を聞いて「大井町線スペシャル『電車を教室にした〇〇先生』」と記録に残そうかとも思ったが、気付くと大岡山駅が近づいており、かなわなかった。

行事が重なり、この印象記をようやく仕上げたところで悲報が届いた：Satoru Iwata, Nintendo Chief Executive, Dies at 55 任天堂の岩田聡社長(1982情報工学科卒)が7月11日に、胆管腫瘍のために、55歳の若さでなくなってしまったのだ。THE WALL STREET JOURNAL.やThe New York TimesにもObituary(お悔やみ)が載っているので説明は不要だろう。岩田さんが母校である本学で講演したときは、あの講堂が学生

で溢れ、立見席が出た。Steve Jobs は 56 歳だった。

Stay Hungry. Stay Foolish.

(注1) 全地球カタログ：米国で発刊されたヒッピー*向けの雑誌。Whole Earth Catalog and its family of publications provide an innovative, groundbreaking pattern of thought that provides access to tools, information, and ideas that help individuals make decisions for themselves.

* Hippie: a usually young person who rejects established social customs (such as by dressing in an unusual way or living in a commune) and who opposes violence and war. 私が米国でポスドクをしていた時に、後にノーベル賞を貰うことになる人の息子さんが大学を中退して、ヒッピーになっているらしいという話を聞いた。当時 (1960~70 年代) は、ヒッピーというと米国社会から異端児扱いされ、眉をひそめる人が多かった。そんな先入観があったせいか、彼らのバイブルが The Whole Earth Catalog だったというのは新鮮な驚きだった。そういえば、遺伝子増幅法 (PCR) を開発して遺伝子工学に革命をもたらした Kary Banks Mullis (48 歳でノーベル化学賞, 1993 年) はヒッピーを自任していた。

(注2) 卒業式でのスピーチの結び： When I was young, there was an amazing publication called The Whole Earth Catalog, which was one of the bibles of my generation. It was created by a fellow named Stewart Brand not far from here in Menlo Park, and he brought it to life with his poetic touch. This was in the late 1960's, before personal computers and desktop publishing, so it was all made with typewriters, scissors, and Polaroid cameras. It was sort of like Google in paperback form, 35 years before Google came along: It was idealistic, and overflowing with neat tools and great notions. Stewart and his team put out several issues of The Whole Earth Catalog, and then when it had run its course, they put out a final issue. It was the mid-1970s, and I was your age. On the back cover of their final issue was a photograph of an early morning country road, the kind you might find yourself hitchhiking on if you were so adventurous. Beneath it were the words: "Stay Hungry. Stay Foolish." It was their farewell message as they signed off. Stay Hungry. Stay Foolish. And I have always wished that for myself. And now, as you graduate to begin anew, I wish that for you.

(注3) 研究対象としたのは機能性生体高分子の代表である酵素。野宗研では、好熱菌の耐熱機構を解明する研究を行っていたが、阿部さんは好熱菌から単離した耐熱酵素 LDH (lactate dehydrogenase, 乳酸脱水素酵素) の動的安定性を調べることになった。酵素を重水 (D₂O) に溶かすとヘテロ原子 (N, O, S) に結合している水素 (H) は重水素 (D) に置き換わる。このスピードは周りの環境や酵素の構造のタイトさによって異なるので、通常の LDH と耐熱性 LDH で H-D 交換速度を測定することにより動的安定性を推定することにしたが、測定装置 (IR 及びラマン分光) は東大にしかなかったため、週の半分ほどは本郷に通ったそうだ。

(注4) Strong points: 阿部さんの場合は、(1) 論理的思考に強い、(2) 国際問題・法律への興味、(3) そこそこの英語力 (←謙遜した表現)、(4) 言葉に対する高い関心。

Weak points: (1) 独創性が低い、(2) 探究心が希薄で飽き易い、(3) 手先が不器用

(注5) 最近では規制緩和の影響で弁理士試験の合格者が増えている：平成 25 年度の受験生は 7,528 人で、合格者は 715 人。大学別では東大 (65 名)、京大 (51)、阪大 (38)、東工大 (35)、早稲田 (28) …となっている。平成 26 年度の実績は、受験者が漸減 (6,216 人)、合格者は激減 (385) となっている；合格率で見ると、10.5%から 6.9%だ。

(注6) 弁理士 vs 弁護士：もともとは、仕事の内容が分かりやすいように辨理士及び辯護士と書いたそうだ。「辨」は「わきまえ知る」、「理」は「物事の道理」という意味ゆえ、弁理士は、“物事の道理をわきまえ知る者”となる。一方、「辯」は「言い開く」、「護」は「まもる」ゆえ、弁護士とは、“言葉を自在に操って、人を護る者”を意味する。

(注7) 海外の出願国：米国 US, ヨーロッパ EP, 中国 CN, 台湾 TW など

(注8) 年末年始の休暇は外国との関係で短くせざるを得ない。

(東京工業大学 博物館 資史料館部門 特命教授 広瀬茂久)